



No. 2686
2014年12月10日
発行責任者 大沼 元
編集責任者 武田 昌仙

超低額回答に怒り！ 貨物1.32ヶ月、12月5日支払を回答



経過説明する大越議長

福島県支部集會では貨物
福島分會熊田委員長が「会
社は鉄道部門の黒字達成を
目標に私達貨物労働者に犠
牲を強いており、夏季手当
と今回の年末手当の超低額

怒りが蔓延

仙地指示第17号を受け、
11月20日、郡山工場支部で
は昼休みに28人の結集で抗
議集會を開催した。また同
日夕方の福島県集會は、郡
連協事務所で開催され、25
人の仲間が抗議集會に参加
した。

各地の集會から

再回答を求め抗議行動

11月14日、JR貨物会社は、14年度年末手当の支払い
で、基準内賃金の1・32ヶ月分（12月5日支払い）と
いう、超低額回答を示した。社員家族の切実な声、願
いに背を向け踏みこむ回答に対し、組合は席上強く
抗議し、各級機関に対し抗議行動を指示。地本内にお
いても各地で抗議行動等を展開した。
しかし貨物会社の姿勢は変わらず、組合は極めて不
満の残る回答であるが、越年賃金をはじめとした組合
員の生活を考慮し、11月21日妥結した。

また20日の宮城県集會に
は宮城県支部と仙総支部の
仲間約70人が結集し、東北
貨物協議会大越議長は「夏
冬合わせて2・52ヶ月の超
低額回答。この間の旅客と
の格差は45ヶ月で家が一軒
建つ差。それでも闘い続け
られたのは国労が全国単一
組織ゆえ。全国大会で単一

家一軒分の格差

回答に若い社員は『騙され
た、見切りをつける』『ロー
ンの返済ができない』等、
怒りが蔓延している。職場
は社員が高齢化し泊まり勤
務も厳しい。労働条件・職
場環境改善にむけ闘う」と
情勢報告と決意表明を述べ、
また各分會代表らが連帯の
決意表明を行い、最後に貨
物超低額回答を許さず全力
で闘い抜く為に、地本原子
書記長の団結頑張ろうで集
會を閉じた。

客貨一体で闘う

最後に決意表明に立った
貨物宮城分會結城書記長は
「現場申し入れ・ファッ
クス行動、ジャンボはがき、
社長宛ての要請書、他労組
へのチラシ配布、本部への
スト要請。出来得る行動・
運動を全て展開してきた。
結果は1・32ヶ月の超低額

- 東北交連第25回定期総会
第19回東日本本部マラソン大会
第27回東日本本部運輸協議会定期委員会
- | | |
|-------|---------------------|
| 11・14 | 東北交連第25回定期総会 |
| 11・15 | 第19回東日本本部マラソン大会 |
| 11・21 | 第27回東日本本部運輸協議会定期委員会 |

東北三地本が学習と交流

労組の優位性の文言削除に
貨物組合員は危惧。会社は
中間決算6億増を示すが、
鉄道部門が赤字であり要求
に応えられないの一点張り。
また職場は人件費削減で更
なる合理化が実施されよう
としており、賃金削減と要
員削減で会社はやっていく
のか」と情勢報告した。

初日は国労本部菊地書記
長と東日本本部佐藤書記長
が問題提起し、続いて組織
拡大についての職場活動報
告が行われた。
仙台地本からは、山形県
支部原田委員長が、職場の
新規採用者獲得の取り組み
について報告し、仙総支部
車体分會の高橋書記長は、
支部と分會の取り組み状況
の経過と今後の決意を述べ
た。続いて秋田・盛岡地本、
貨物協議会が組織拡大や職
場活動報告を述べた。

構造矛盾改善の取組を・企業責任果たせ

再回答を求め抗議行動

続いて宮城県支部秋山委
員長は「貨物会社の構造矛
盾を改善しなければ会社の
運営自体が困難。労組とし
て改善させる取り組みが必
要」とし、引き続きの支援
と取り組みの強化を表明し
た。更に仙総支部阿部副委
員長は「貨物会社は構造矛
盾のしわ寄せを社員に転嫁
し、15年連続ベアゼロ等に
より生活は極めて厳しく、
満額回答で企業責任を果た
すべき」と抗議し、今後も
貨物労働者と共に闘う決意
を述べた。



労働講座の会場の様子

最後に決意表明に立った
貨物宮城分會結城書記長は
「現場申し入れ・ファッ
クス行動、ジャンボはがき、
社長宛ての要請書、他労組
へのチラシ配布、本部への
スト要請。出来得る行動・
運動を全て展開してきた。
結果は1・32ヶ月の超低額

- 国労東北協議会新役員
- | |
|---------------------|
| 議長 佐藤 浩一（秋田） |
| 副議長 佐々木 力（盛岡） |
| 副議長（兼）事務局長 大沼 元（仙台） |
| 幹事 後藤 重文（秋田） |
| 幹事 沢田 光広（盛岡） |
| 幹事 原子 清貴（仙台） |
| 幹事 大越 喜一（仙台） |

また一日目の活動終了後
には、国労東北協議会第29
回定期総会が行われ、向こ
う一年間の活動方針を決定
した（新役員は別掲）。
二日目の労働講座では国
労盛岡地本弁護団の佐々木
良博弁護士から「労働法制
見直しと働き方」と題した
講演を受けた。

その後全体討論を行い、
最後に東北協議会佐藤議長
の団結頑張ろうで散開した。
全体討論の発言など

▼TKKとテクノの車両部門を統合する提案がテクノの労組にあった。

▼原発・放射能問題。常磐線竜田〜広野間の運転再開は関係する全ての社員が危険な状況。労働者や利用者の安全を守るといふ国労の姿勢が問われる。ストで闘うべき。支持・理解も得られるのでは(仙台)

▼組織拡大では盛岡から教訓的な話。やったことが無駄にならないと信じ進めている。諦めないことが大事。

▼支部委員長が職場に入り、その成果が北上の職場での拡大に結実。秋田の各分会大会では地本役員が入りオルグしていく。

▼組合としてでなく社員の意見として話を聞く、というのとはどこも同じでは。ただ国労組合員が職場の問題を考へ改善しようとしている姿を見ることが大切(秋田)

▼組織拡大は時期を逃さずしっかりと取り組む。考え過ぎてチャンス逃していきと感ずる。

▼仕事を切り口に、超勤せざるを得ない若手どう関わっていくかが課題。

▼関連会社の窓口問題。会社施策であり、支社に対して今後責任を求めていく。(盛岡)

意見・発言への答弁

◆スト配置。戦術委員長会議が設置されている。持つて行く。

◆常磐線、危険な状態は確か。ストで全体的な理解が得られるのかと言えはどうか。水戸動労がストを打っているが広がっているかといえは疑問。働く人たちの気持ちに大切に、会社にかに安全を担保させるかを考えてきた。避難している人たちの苦悩等を考え向き合っていく。(本部)

◆手当の回答。遅れているのは京浜東北の根岸線の問題ではなく、会社と東労組の要求の乖離と聞いている。緊急申し入れをし早期に回答を求めている。

◆関連会社との窓口は、支社跨がりはエリア本部、他は地方と決めている。会社施策である以上、会社に責任をとらせることが必要。

◆会社統合の情報は無いが、説明すべき事はしるど釘を差している。

◆スト配置。12月に第2回中央戦術委員会がある。

◆全国オルグ日程が決定、9地本全てにエリア本部も同行する。(東日本本部)

退職のお知らせ

10月31日付

山口 義恵さん
仙台駅連

後藤 弘さん
山形連合

三塚 昇さん
小牛田運輸区

引地 秀典さん
仙台保線区

橋本 昭二さん
仙総車体
(Jテック幹総)

長い間お疲れ様でした

親父、頑張ったぜ！

準優勝で花飾る

11月15日、第19回国労東日本マラソン駅伝大会が開催された。今年は、仙総支部駅伝チーム(地本選抜)の支部責任者であり監督的存在であった、故原田靖氏の家族が参加し、見事準優勝を飾った。

また今回は久しぶりに仙台地本から2チームが出場するなど、「参加者全員で楽しもう」を合い言葉にそれぞれの思いを胸に秘め、力の限り走りきった。

【特別寄稿】 仙総支部小松知喜さん 故原田氏につなぐ檣

今回の大会は仙台地本チームにとって特別なものとなった。言うまでもなく今年6月に54歳で他界した原田靖氏の事である。

原田氏はこのマラソン大会に選手として、また支部の責任者として活躍していた。2年前大病で手術の後も退院2ヶ月足らずで参加し個人の部で力走。周りからの「傷口開くぞ」の声を笑い飛ばし、健在ぶりをアピールしたものであった。

集合したメンバーに高橋真人チームキャプテンが配った物は原田氏の写真を入れた。最初個人部の部が60数名の参加でスタート。高橋祐輝君が飛び出しトップはそのまま祐輝君。

しかしゴールの係員の立ち位置が分かりづらく、祐輝君は我々の待機場に戻ってきていた。係員の「29番戻ってきていません」の声にあわてて申請、記録は？順位はどうなる？と心配したが無事認められ見事優勝を飾った。

そして駅伝である。1区は休む間もなく祐輝君。レースは昨年1区区間賞の高崎チームが飛び出し、盛岡チームは箱根駅伝経験者が今回出ない情報が入っていたが、代わりに弟が出るという布陣、そして個人トップの祐輝君との三つどもえ戦となった。親子とはこんなにフォームまで似てしまうものかと言えり、そのDNAはしっかりと受け継がれ祐輝君の子供へも？

近い将来親子三代の参加も不可能ではない。他のDNAについては祐輝君曰く「芸風も僕の方が上です」と笑ったが、それはそれで心配だ。

結果は高崎が1位、仙台が2位で檣をつないだ。2区は南幅選手、他チームから外国人選手か？と疑われんばかりの走り威圧・圧倒するも順位を一つ落として3区の大知里に檣が渡った。

隠れエースの大知里選手、「負けらんない」精神で若手主体の高崎チームを猛迫したが、前を走るスーパードライ女子小学生を抜くのをためらったか、代々木公園の生き残りの蚊に刺され急性デング熱にやられたか定かではないがそのまま3位で4区佐々木晴基選手に檣を渡す。

晴基選手は「世話になったヤス先輩からの恩を返すのはこの走りしかない」の思いを胸に、5区で待つ尚人君に少しでも順位を上げて檣を渡そうと、故障をものともせず渾身の走りをみせ一つ順位をあげて檣を渡す。



快走した高橋から南幅へ



「死ぬ〜!」「任せろ!」

そしてドラマが生まれた。6区で待つアンカーはもちろん高橋キャプテンだ。係員が9番準備して下さいの声、9番は我が仙総チームだ、ということとはトップかと周りがざわめいた。

まもなく数十メートル先から仙台チームのユニホームが見えてきた。「尚人君だ!」。ヤスの面影を強く残す風貌と走り、生前の元気なヤスの姿を重ね合わせずにはいられなかった。待っていた我々は「ヤスが、ヤスさんが!」還って来た。心準備もままならない高橋キャプテンはゴールに飛び込んできた尚人君をそのまま立ち止まって祝福したかった衝動にかられたに違いないが、ここはスタートしなればならない。不自然な体勢で檣をつかみ最終のコースを走り出した。

拍手で迎えられた尚人君は、「初め1人に抜かれたけど後半で2人抜き返ししました」と満面の笑みで話し、大役を成し遂げた安堵感であふれた表情には清々しいものがあつた。

レースは大詰め、逃げ切りを図りたい高橋キャプテンに立ちちはだかったのは前年度優勝の長野チーム。V2を狙うアンカーは前回区間賞の強敵であり、初優勝かV2かの争いになった。終盤で長野チームの背中を見ることがあったが、誇るべき堂々の過去最高順位の2位である。優勝の夢は次回以降に持ち越しとし、大いにチームの健闘を称えたい。

今回、仙台地本は駅伝2チームを結成、もう一つのチームとして山形県支部を中心メンバーにして、仙総から佐藤勝成選手、高橋正人選手の2名が加わり、同じ快走を見せてくれた。閉会式が終わり会場を別にした打ち上げ会で高橋キャプテンは、「今回は原田と一緒に走ろうと考え、そしてみんなにも走って欲しくてこのような物を作った。協力ありがとう」という趣旨の話をした。

普段なら一秒間に10文字以上しゃべるキャプテンだが今回は一言ずつ言葉を噛みしめるようにゆっくり話した。

ヤスへの思いがフラッシュバックし万感胸に迫るものがあつたのだろう、言葉が途切れる部分もあった。それは聞いていた人達にも十分伝わり、にぎやかだった会場にしばしの静寂が訪れた。最後に来年の健闘を誓い合い解散した。

【※編集部より 長文のため内容を一部割愛させて頂きました。全文は仙総支部の機関紙等でご覧いただけます】